

近世(安土桃山・江戸時代～) 徳川幕府との結びつきにより 復興、里坊のまちへ

明智光秀による復興の先駆け

比叡山焼き討ち直後、信長は明智光秀に近江国滋賀(志賀)郡を与え、京と比叡山の拠点として坂本城の築城を命じました。光秀は築城後、坂本城を拠点に近江の平定を行いました。また上坂本にある西教寺の檀徒となり、灰塵に帰した寺の復興に力を注ぎます。1574(天正2)年には仮本堂が完成。坂本復興の先駆けとなりました。本能寺の変の後の1586(天正14)年には廢城となり、資材は大津城築城に使用されました。現存する西教寺の総門はこの坂本城城門を移築したと伝わります。



慈眼大師天海の活躍

信長失脚の翌年には日吉社社殿の再建がはじまりました。そして本格的な再興に尽力したのが徳川三代將軍に仕えた慈眼大師天海です。天海は、東塔の南光坊に住んで比叡山と坂本の再生に取り組みます。坂本は幕府より寄進された寺領となり、穴太衆によって造成された里坊の町として復活。道や社は以前のままに、皇室出身の座主の隠居所である滋賀院門跡を中心に、山上に倣って東塔・西塔・横川と里坊を群居させ、各塔ごとに行政機能を持つ総里坊を置きました。

神仏習合が息づく里坊のまち

総里坊を坂本に置いたことで、山修山学の「山坊」に対して、麓の「里坊」の役割分担が明確になり、平稳が訪れます。総里坊では公人(妻帯と名字帶刀を許された延暦寺の僧侶)が比叡山の治安維持や寺領からの年貢の徵収などの寺務を行い、比叡山全体の運営を支えました。時は進み、明治維新になると神仏分離令が発布され日吉社と比叡山延暦寺は分離します。しかし人々の暮らしには神仏習合の習わしが息づき、現代になって神仏習合の文化の価値が再認識されるようになりました。



里坊
と
穴太衆積み



美しく堅牢な 街並みを形成

里坊の町を歩くと、美しい石垣が落ち着いた町の景観をつくりだしていることに気づきます。これらの石垣を作った技術者集団を穴太衆といい、彼らは伝教大師・最澄が比叡山に延暦寺を開創する時とともに山に登り、造成のための土木工事を請け負ったと考えられます。江戸時代に始まった坂本の復興にも、穴太衆が活躍しました。「石の声を聞き、石に従って」自然石を巧みに組み合わせて石垣をつくる穴太衆は築城にその力を發揮しました。現在もその堅牢さが評価され、新名神高速道路の造成にも採用されました。



世界文化遺産 重要伝統的建造物群保存地区 比叡山延暦寺と比叡山坂本

歴史さんぽ

古きをたずねて永遠を知る

比叡山延暦寺とその門前町比叡山坂本が培ってきた歴史文化が評価され、1994(平成6)年、古都京都の文化財の一つとしてユネスコの世界文化遺産に登録されました。古代、中世、近世にわたるその長い歴史を紐解くと、いつの時代も人々が求めてやまない魂の煌めきを発見できるかもしれません。



古代(奈良・平安時代)

神と仮は比叡山で出会った 神仏習合により仏教が浸透

桓武天皇と最澄の出会い

古くから神の宿る山として崇敬されていた比叡山。その東麓の坂本に生まれ育った最澄は、僧侶となって比叡山に籠り「悟りに至る道は全ての人に開かれる」という平等思想を説いた法華経に出会います。788(延暦7)年には比叡山にこの教えを礎とする山修山学の道場「一乘止観院(現在の根本中堂)」を創建。その6年後、桓武天皇は平安京遷都にあたり、最澄率いる新しい仏教を評価され、平安京の鬼門を守る鎮護国家寺院に任命。ここから比叡山延暦寺の歴史は始まりました。



日吉大社境内の八王子山頂に並ぶ三宮(右/鴨玉依姫神荒魂)と牛尾宮(左/大山昨神荒魂)



大講堂には比叡山で修行した歴代の僧侶像が並ぶ

末法時代の比叡山の繁栄

平安を祈り造営された平安京も、平安末期になると地震や旱魃、疫病や戦乱などの災禍が続き、京の人々は信仰に救いを求めます。人々の救済を使命とする山修山学の道場として、教理や環境の整備に尽力していた延暦寺は、最澄の入滅後も円仁・円珍・良源などの高僧を輩出。朝廷や貴族から崇敬を受け、全国に荘園を持つ一大権門寺院へと成長しました。また鎌倉仏教の各宗派を生み出した法然、栄西、親鸞、道元、日蓮らが比叡山に学び、日本仏教の母山と呼ばれるようになりました。



明治以前は本殿下の下殿で
仏事が行われた
神社の鳥居に合掌の形が融合した山王鳥居

延暦寺と日吉大社の神仏習合

幼い頃から山の神々に親しんでいた最澄にとって山川草木に宿る八百万の神に仮性を見出すことは自然なことでした。桓武天皇の庇護を受けて唐に渡り、留学した天台宗国清寺には守護神として山王祠が祀られました。これに倣い最澄は日吉社の神々を延暦寺の守護神としました。日吉の神々を仏と関連づけ、大己貴神(西本宮)を釈迦如来、大山昨神(東本宮)を薬師如来とするなど、比叡山における神仏習合は山王信仰として、天台宗の発展とともに日吉社は全国に広がりました。



神仏習合による祭典 「北野御靈会」を再興

新型コロナウイルス禍や相次ぐ天災に翻弄される国の安寧を神と仏の双方から祈り支えたいと、令和2年9月「北野御靈会」が再興しました。応仁の乱による休止から実に550年ぶりのことです。北野天満宮の神職と延暦寺の僧侶が並び、神仏習合によって営むのも1868年の神仏分離以来のこと。神仏分離までは、同天満宮の別当は天台宗京都五箇室門跡の一つ曼殊院門跡の門主が兼ね、僧侶が祭礼や社務全般を務めていました。現在も比叡山の回峰行者が、京都切廻り・大廻りで同社を参拝するのは山王信仰に基づくものです。



京都北野天満宮御本殿

中世(鎌倉・室町・戦国・安土桃山時代)

坂本に一大経済圏を形成 比叡山の影響力が壊滅を招く

びわ湖は物資輸送の大動脈

近江地方は日本海にも近いことから古代より国土防衛の要塞でした。白村江の戦いに負けた天智天皇が飛鳥から大津宮に遷都したのも海外からの侵略防衛を意図したからです。またびわ湖は裏日本と表日本を結ぶ物資輸送の大動脈でもありました。東北や北陸、東海地方から(北前船や北陸道・中山道を経由して)運ばれた年貢や物資は、一旦湖上を渡り港で陸揚げされたのち京都方面や大阪方面に向いました。比叡山・日吉社の繁栄を背景に陸揚港として最も栄えたのが坂本の港です。



近江八景と丸子船(滋賀県立琵琶湖博物館B展示室)



八王子山から下阪本を望む

比叡山の表玄関として経済を掌握

比叡山東麓の坂本は延暦寺・日吉社の門前町として、湖に面する下阪本は港町として栄えました。北国海道と比叡山への参道が交わる下阪本の比叡辻や富崎(現在の戸津)に、馬借や車借と呼ばれる運送業者が集住し、また金融業者である土倉や各種の問丸(問屋)が軒を連ねました。経済力を持った彼らは、しばしば徳政を要求して土一揆を起こしました。鎌倉時代の後期には京都の土倉の多くが延暦寺の支配下に入り、室町時代になると京都の実質的経済は延暦寺の制御下に置かれました。



かつて下阪本の港、富崎があつたあたりに山王鳥居が立つ

戦乱の渦中へ、そして比叡山焼き討ち

一方延暦寺の衆徒(僧侶)はその宗教的権威を活用し、自分たちの護法神である日吉社の神輿を担いで、朝廷に要求をのませることもありました。また園城寺をはじめとする敵対勢力との抗争に備えて強大な武力を保持し、室町時代には幕府と対立するなど、政治の戦乱に巻き込まれていきます。そして延暦寺と坂本に壊滅的な打撃を与えたのが、1571(元亀2)年の織田信長による比叡山焼き討ちです。その後豊臣秀吉が湖上輸送の拠点を大津に移したことで下阪本の役割も終わりを告げました。



日吉大社の縁起が 一幅の絵巻のように

791(延暦10)年、桓武天皇が日吉社に2基の神輿をご寄進されて以来1200年の歴史を有する日吉大社の春の例祭です。船渡御では、天智天皇により大和大神神社より國を守る神として勧請された大己貴神の御鎮座の由来を。祭のピークである宵宮落としでは、比叡の地主神大山昨神が、京都下鴨神社のご祭神・鴨玉依姫神と結婚し、上賀茂神社のご祭神・賀茂別雷神を出産するまでの模様を勇壮な神輿振りにより表現。古来は同祭と京都賀茂神社の葵祭は一連の神事であったといわれます。



山王祭 宵宮落とし